

豆食之是稱眞盛衣豆寺尼紙囊盛之贈檀越家倭俗團餅細截之熬過者是謂霰以其形相似稱之。〔嬉遊笑覽十上飲食〕雍州府志に炒豆は○中霰もちをいふなり是を霰といふも古き名なり櫻井基佐が發句に老松の葉にはさかむや霰餅諸艶大鑑内儀も手拭にあられに大豆などりませし菓子袋のはなむけといへるも是なり但今の製大葉芥の青粉は用ひず青のりを粉にしてかくる霰を雜へざるは眞盛寺の本製よりも却て古製なり。

〔雍州府志六土產〕缺餅○中圓山安養寺并雙林寺靈山正法寺僧嚴冬製餅是爲片團乘半乾三寸許薄切之陰乾以文火遠焙之而後納壺内每有賓客供之凡家々總雖有之不及三寺之製其内安養寺製造爲特勝故專謂圓山缺餅近世盛筭送遠方充方物。

〔類聚名物考飲食二〕合餅。あはせもち。あはせ今略云

今案に祇園二軒茶屋の合餅は名産なり六月朔日十一月朔日には必ず作りて出すつねはなし望めば作る小さ丸く平き餅を豆腐の田樂と二ヶ合せて串にさして上に葛あんをかけたるものなり今は略てあはせとのみいへり京の人も今は知る者まれなり。

〔東海道名所圖會四〕丸子安部川(中略) 東川端を彌勒茶屋とて阿部川餅の名物也。

〔本朝世事談綺一〕飲食幾世餅。

根元は兩國橋西詰にあり前は鐵砲町に住してすこしき餅を商ふ此者の妹にかもんと云ありこの女の夫は蕨驛の某にて大百姓なり渠と示し元祿十七年にはじめて廊をかまふ其餅甚味美にして榮ふ今所々にこの名あるはこれに准もの也何ゆゑに幾世餅と名付たりや。

〔守貞漫稿後集一〕餅。

幾代餅余川(喜田季莊)が所聞ハ吉原ノ娼幾世ト云者花街ヲ辭シテ後始テ賣之故ニ名トスル也何レ歟是ナルヲ知ラズ今世モ兩國ト神田見附内トニアリ二戸トモニ甚粗製也世事談ニ美味ト云